

## <特集論文> 『おもろさうし』の係助詞「す」とその呼応

著者	松永 明
雑誌名	日本文学誌要
巻	51
ページ	68-77
発行年	1995-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019797">http://hdl.handle.net/10114/00019797</a>

# 『おもしろさうし』の係助詞「す」とその呼応

松 永 明

## 一 初めに

この論文は十六・十七世紀にかけて編纂された沖縄の古歌謡集『おもしろさうし』にみられる係助詞「す」（注一）の係り結びの、特に已然形・命令形との呼応を中心に取り上げ、考察を加えるものである。この問題を取り上げる理由は、古代中央語の係助詞「こそ」に相当して結びの語は已然形で受けとされるオモロ語の係助詞「す」において、次に挙げる例のように、「こそ」にはあまり見られない、命令形との呼応が、数多く存在すると思われるからである。（カッコ内は筆者による口語訳。以下同じ。）

001801 きこゑ大きみきや 首里もり おれわちへ

（聞得大君が 首里杜に 降り給いて）

ひやくさきやめ おぎやかもしよ ちよわれ

（百歳まで 尚真王様こそは おわしませ）

係助詞の結びが「已然形による曲調終止法（注二）」であるか、「命

令形による命令法」であるかで、文の解釈が異なってくるのは無論である。また多くのオモロは、対句部と各節ごとに繰り返される反復部からなるが、「す」の結びが、一首のオモロの終わり、もしくはこの用例のように反復部の末尾にある場合、この問題はオモロという歌謡全体の詩的構造にもかかわってくる。祭式場で謡われた神歌であるオモロが、命令法で終わっているか、曲調終止法で終わっているかという重要な違いが生じるからである。したがって係助詞「す」の係り結びを考察することは、『おもしろさうし』に収められるオモロという歌謡の性格にもかかわる重要な問題といえよう。

後述するように、筆者はこの種の結びが命令形であると考えが、「す」已然形の呼応としても命令・願望・希求などの表現性が無視されてきた訳ではない。たとえば仲原・外間（一九七八）の「ちよわれ」の項には、

居給え。坐しませ。動詞「く（来）」の連用形「き」の口蓋化した「ち」に補助動詞「よわれ」の付いた形。

と命令表現で訳されているし、高橋（一九九一）には

「すゝ已然形」は多くのばあい、強意を表すのであるが、中には丁寧な命令、あるいは願望と解釈した方が落ちつく例がある。(三三六頁)

という指摘がある。しかし、次に挙げる少数の例外を除けば、命令形との係り結びとしては認知されてはこなかったように思われる。管見では、この種の係り結びを命令形とのそれと捉えてきたのは、伊波普猷と内間直仁氏の二人のみである。

伊波普猷は、「す」の結びを、

(第一類) 已然法で結び条件句を形成して下に続いて行くもの

(第二類) 転じて文末を已然法で結ぶもの

(第三類) 命令法で結ぶもの

の三種類に分け、次のように述べている。

### 第三類

(中略)

大ぬしすまぶれ(守レ) わかぬしすまぶれ

あんどおそいすともゝすゑちよわれ(国王万歳)

此す。又はしよは多く名詞にそへて、下なる命令法に応ずるものである。琉球古語唯一の辞書『混効験集』を按ずるに、すは「言葉の結也所により心替也。てるかはす世のむすびつけおるせ。さうすれかうすれといふ心か」とある。

(伊波(一九一〇)、伊波普猷全集第一卷二八五頁)

また、内間直仁氏は次のように述べておられる。

「す」はもともと已然形結びであつたであろうが、オモロが神歌であるという性格上、願望・希求をうたう場合も多く、その願望・

希求の意も托しつゝ、「す」の強調表現をとるとなれば、その結びは命令形にならざるをえなかったことであろう。なぜなら、命令形は願望・希求の意も託せるし、また形も已然形と同じで、違和感をもたずに結びに使えたものと解される。

(内間(一九九四)、一〇〇〜一〇一頁)

以上の指摘を踏まえ、本論では次のような調査・研究を行った。

①係助詞「す」の係り結びの用例の中で、類型表現・文脈などから命令形と判断すべき例を提示し、「す」と命令形との係り結びを示す。

②「す」の結びにおいて、命令形を設定する必要性を示す。

③係助詞「す」の係り結びの全用例を調べ、正格との呼応がどの程度保持されているか調査し(注三)、正格と破格について考察する。

なおかいつまんでの結論をここに記せば、係助詞「す」の係り結びは、形態上の呼応(「すゝエ段音」)はかなり保たれている一方で、古代中央語の「こそゝ已然形」のような曲調終止の割合は少なく、「こそゝ命令形」という結びが多い、というものである。

## 二 係助詞「す」と命令形との係り結び

オモロ語の係助詞「す」は、古代中央語における係助詞「こそ」に相当する。しかし「こそ」が命令形と呼応する用例は少ない。例えば岡村和江氏によれば

一六世紀には、命令形との対応が見える。

前からこそ下りさせられい。(天草本平家物語)

(松村(一九六四)、五七一頁)

とされており、中古以前、「こそ」と命令形との係り結びがなかったこ

とが推測される。また鈴木（一九七七）では

命令形は、もちろん、きき手への命令を意味するときにつかわれる。

「ぞ」「なむ」「こそ」の強調文にあらわれるとしたら、それは、後世のいわゆる文語文のなかである。（二六一頁）

と指摘されている。なのにどうしてオモロ語では係助詞「す」が命令形に呼応しているといえるのか。

一つは類型表現と文脈からの類推である。たとえば次のような用例がある（この用例は類似が判るように全文を載せる）。

（六卷三二二）

きこへきみかなしねいしまいしのふし

一 きこゑきみかなし

（名高い君加那志神女（のオモロです））

とひやくさす ちよわれ

（国王様は）千歳も末永くとこしなえに おわしませ

又 とよむきみかなし

（鳴響む君加那志神女（のオモロです））

又 きこゑあんしおそいや

（名高い国王様は）

又 とよむあちおそいや

（鳴響む国王様は）

（六卷三二七）

きこへきみかなしねいしまいしのふし

一 きこへきみかなし

（名高い君加那志神女（のオモロです））

ともゝと ちよわれ

（国王様は）千年も末永くとこしなえに おわしませ

又 とよむきみかなし

（鳴響む君加那志神女（のオモロです））

又 きこゑあんしおそいや

（名高い国王様は）

又 とよむあちおそいや

（鳴響む国王様は）

この二首は、外間（一九九三）では、重複・類似のオモロとされており、係助詞「す」による強調を除けば、ほとんど同じ意味である。

けれども同一の巻内（六卷）あつて、なおかつ「ともゝと（十百年）」と「とひやくさ（十百歳）」という違いもあるので、類歌であつても重複歌とは考えづらい。この類歌からすれば、三三二番第一節の「す」と呼応している「ちよわれ」は、命令形と判断せざるをえず、已然形（による曲調終止）をとすることはできない。

このように「按司襲い（＝国王）」は「ちよわれ（おわしませ）」と結び表現は

000601 きこゑ大ききみきや かくらゑが とりよわちへ

（聞得大君が 天上の吉日を 選び給いて）

あんしおそいす| ともゝすへ ちよわれ

（国王様は 千年末までも おわしませ）

004101 あかるおりかさが 大きみに しられて

（揚がる降り笠神女が 大君に 申し上げて）

いけな ゑらて おろちゑ

（現実世界の女神を 選んで（靈力を）降ろして）

あんしおそい ともゝすへ ちよわれ

(国王様は 千年末までも おわしませ)

のように、『おもしろさうし』に頻出する一種の定型句である。「按司襲い」の部分が出されておらず、一見冒頭の神女名などが「ちよわれ」に係っているように見える例(前出の三三二、三一七番など)もそのバリエーションと考えられるが、例えば第一巻を例にとれば、四一首中の実に十首(注四)がこの種の類型的表現である。これらは「す」によって国王が強調されている場合も、そうでない場合もあるが、どちらにせよ国王の繁栄を予祝・祈願して、命令形で文を結んでいるように思われる。

このように類型表現と文脈から命令形と考えられる例は「ちよわれ」に多いが、

045301 あかのこか おもろつゝみ うたは

(阿嘉の子が オモロの鼓を 打ったならば)

もゝうら うちよせれ

(百浦(「たぐさんの集落」)を 打って寄せよ)

045501 あかのこに よせうち もちゑ とらちゑ

(阿嘉の子に 寄せ打ち(「鼓」)を持って 取らして)

よせうちしゆ しまは うちよせれ

(寄せ打ちで 島(「国、集落」)を 打って寄せよ)

のような「ちよわれ」以外の例もある。

またこれ以外にも、命令形が「す」の結びの語となっている例として、次の用例があげられる。

003601 あんしおそいや 金うちに ちよわれ

(国王様は 首里城に おわしませ)

世のさうぜ しよわれ

(世事についての御思慮を し給え)

大きみす けい やりよわれ

(大君は 氣(「靈力」)を やり給え)

003602 あんしおそいや けおのうちに ちよわちへ

(国王様は 京の内に おわしまして)

世のさうぜ しよわれ

(世事についての御思慮を し給え)

せたかこす けい やりよわめ

(精高子は 氣を やり給わん)

「大きみす けい やりよわれ」と「せたかこす けい やりよわめ」の部分は、反復部・対句部いずれの可能性もあるが、いずれにせよこの部分は、オモロにおける対句の常套として、同一の内容を異なる言葉で表現している。したがってこの場合「よわれ」は命令形でないと、対句の表現性に歪みが生じる。なぜなら已然形による曲調終止では、助動詞「む」の意味——希望・勧誘・命令など——は表現できないからである。(注五)

### 三 結びを命令形とすることの必要性

以上のように「す」の結びでありながら、願望・希求という表現性をもっていると判断せざるを得ないものは数多い。これらを係助詞「す」の結びになっているという理由で已然形とするならば、前出の高橋(一九九一)のように、已然形における命令表現を想定する必要がある。しかしそれよりは「す」の結びが命令形であるとしたほうが、「国王(十す)ゝちよわれ」という類型表現における活用形の整合性を

考慮した場合、合理的であるように思われる。

また、オモロ語では、本土古語の二段動詞が一段動詞となり、さらにもともと一段動詞であったものも併せて、ラ行四段化が進行している結果、「す」に呼応している語は已然形と命令形が語形を同じくしている（外間（一九六〇）、高橋（一九九一）による。実際の結びの語は後述の表2に挙げた。ただし助動詞は例外的である。）ので、例えば第五活用形というようにして、已然形と命令形を併せた活用形を設定することも不可能ではなからうが、次の力行変格活用

026501 なおちきよか しよりかち くれは

（直ち子が 首里へ 来るからには）

080104 やわくくと おちへ こう

（やわやわと 押して来い）

のように已然形と命令形がはつきりと異なる語形をもつ動詞があるので、そうした場合はこれらとの整合性が問題となろう。

以上のような理由で筆者は係助詞「す」と命令形との係り結びを認めるべきと考える。

#### 四 「す」の用例の抽出

係助詞「す」の全用例を数えると、全部で四七七例あった。しかし全用例が結びの語と一对一の対応をなしているわけではなく、次のような変則的な呼応もあった。

①二つの「す」がひとつの結びに係っているもの

038401 あちおそいきや うへさしやる まつなみ

（国王様が 植えて差しておいた 松並木）

ともゝとす とひやくさす いのらめ

（千年も 千歳も（永くあれと） 祈ろう）

このような例は、已然形の結びが二例というように数えた。

②変形的な対句と思われるもの

009406 あまのいしややこに あまのまなしやにしよ

（最上の敬愛するお方に 最上の敬愛するお方に）

009407 およりとて おれわちへ おなおさとて おれわちへ

（御為として 降り給いて 御直さとして 降り給いて）

これは「あまのいしややこ」と「あまのまなしや」が対句で、後者にのみ係助詞「す」が付されている。このような例はこれだけだが、これは接続形一例と数えた。

このようにして計算した結果は表1のようになった。

（表1）

結びの語		小計
結語なし	①結びが表記されていないもの あるいは終助詞的に「す」 が用いられているもの	
又は不明	②未詳語	
	2	67

合計	正格	破格					
	⑩已然形・命令形	⑧体言（名詞）	⑦連体形	⑥終止形＋助詞「な」	⑤接続形（但し係り結びの流れと区別困難）	④連用形	③未然形
	3 6 4	5	1	2	2 2	7	9
4 7 7	3 6 4	4 6					

①の「結びが表記されていないものあるいは終助詞的に「す」が用いられているもの」とは、

037101 : あかたゝみかなししよ あんしかすの わう

（我らが敬愛するお方こそ 按司達の 王である）

037102 : あかたゝみかなししよ

（我らが敬愛するお方こそ）

のように繰り返される部分の表記が省略されているものや

099605 にしみちの ちやなみちる いきやしゆ

（西道の 謝名道を行こうぞ）

099506 ひかみちの やきみちる いきやしよ

（東道の 屋宜道を行こうぞ）

のように「す」が終助詞的に用いられているものを指す。これらは例えば

020307 てるかはか おことす てるしのか 御ことす

のように、いずれか判別が困難なものもあるので、係り結びを考えるうえで対象からはずしておく。

①と②をはずすと、「す」の用例は全部で四一〇例になる。そのうち已然形・命令形は計三六四例、それ以外は計四六例となり、正格というべき已然形・命令形の占める割合は88・8%、それ以外の破格が11・2%になる。この数字は延べのものだが、異なる文脈での「す」の用例の正格・破格を計算した内間（一九九四、一〇二頁）の「正格八四パーセント」に近い数値であり、已然形・命令形を正格とする場合、「す」の係り結びはかなり保持されているといえる。

## 五 係助詞「す」の結びの語形

正格の⑩已然形・命令形を結びの語（の語形）ごとに分類すると表2のようになった。（ ）内は用例数で、踊り字（ゝ）は仮名に直した。（語形による分類なので、品詞が異なるものが同じ項にまとめられている場合がある。）

(表2)

行	ア行	カ行	サ行	タ行	ナ行	ハ行
結びの語(已然形・命令形)	あれ(2) いのれ(1) うちよせれ(1) おどせ(1)	かかれ(1) かなわせ(1) かへれ(1) かゑれ(4) ききとれ(2) けすれ(1)	そへれ(1) そゑれ(3)	たれ(47) ちやうわれ(1) ちやれ(12) ちよわれ(77) つきおろせ(1) てつれ(1) とよめ(17)	なよれ(1) にせれ(2) ね(6)	はやせ(3) はりやせ(4)
合計	5	10	4	156	9	7

マ行	ヤ行	ラ行	ワ行
まふれ(28) まぶれ(4) まへ(1) みおやせ(10) みまふれ(2) め(47) もとせ(1) もとれ(1)	やれ(3) よしれ(8) よせれ(2) よれ(24) よわれ(36)	れれ(4)	われ(2)
94	73	4	2

(合計364例)

結びの語の語尾が「―れ」以外のもの…92例(25・3%)  
 結びの語の語尾が「―れ」のもの…272例(74・7%)

表2から、正格において「す」の結びの語はすべてエ段音であることが判るが、この点「す」と「こそ」とは似ている。なぜなら古代中央語において「こそ」活用語という係り結びの場合、結びの語が用言である場合、すべてエ段音で終わるし、結びの語が助動詞である場合も、已然形がない助動詞(らゆ・ましじ・ごとしなど)と不規則的变化をする助動詞(き・らし・じなど)を除いては、エ段音で終わるからである。

結びの語が已然形・命令形であるものを正格とする場合、破格が少



ないこと、また結びの語がすべてエ段音であることから、「す」の係り結びはかなり保持されているといえる。

## 六 正格の已然形・命令形の分類

類型表現がなく、文脈から判断せざるを得ないものも多いが、あえて結びを分類すると表3のようになる。

(表3)

已然形	140 (38・7%)	364 (100%)
命令形	224 (61・3%)	

「す」の結びのうち、已然形が占める割合が38・7%、命令形の占める割合が61・3%、ということになる。この点は前述の古代中央語の係助詞「こそ」とは大きく異なる。ただし前述の「ちよわれ」のような類型表現が多いので、オモロ語以外の状況で「す」已然形より「す」命令形が多かったかどうかは判断がつかない。

## 七 命令形が「す」の結びになり得る理由

『おもしろさうし』において、なぜ命令形が、已然形で結ぶはずの係助詞「す」の結びになり得るかは、内間(一九九四)で指摘されているとおり、命令形の語形が已然形と同じだからだろう。前述のように二

段動詞の一段動詞化、また一段動詞のラ行四段化の結果、ほとんどの「す」の結びの語においては已然形と命令形は同形となっている。ゆえに「す」が文末において本来已然形の言いきりを要求しても、エ段音という類推が働き、命令形で応じることを可能にしたものと考えられる。

## 八 まとめ

本論をまとめれば以下のようになる。

オモロ語では二段動詞の一段化、一段動詞のラ行四段化が進んでいることもあって、係助詞「す」の結びの語は已然形と命令形の区別が付き難いが、「す」は命令形にも呼応している。命令形と已然形を正格とするならばこの係り結びは「す」エ段音」という形でかなり保たれているといえる。一方「こそ」と異なり、「す」は命令形と呼応しているものが多数である。用例に類型表現が多いとはいえず、このことから古代中央語の「こそ」に比べてオモロ語の「す」の係り結びの力は弱いと考えられる。

以上のことは、係り結びという現象が消滅した現代の本土方言でも「こそ」がなお係助詞として命脈を保っているのに対して、琉球方言では「す」およびその係り結びがほとんど消えてしまったことと深いかわりがあるように思われる。つまり現代まで係助詞としてのこの琉球方言の係助詞「ど」(古代中央語の「ぞ」に対応)「が」(古代中央語の「か」に対応)に比べ、すでにオモロ語の時代から、「す」の係る力は衰退していたと思われるのである。

## 九 終わりに

以上が係助詞「す」における考察である。以下は、今後の課題をいくつか挙げたい。一つは同じ『おもしろさうし』における強調の係助詞「ど」と「す」との違いである。前述の通り、「ど」は現代まで生き延びている。にもかかわらず用例の数だけをとると、『おもしろさうし』では「ど」より「す」のほうがずっと多い。これはなぜなのか。平安末以降、「ぞ」は地の文に多く、客観的・説明的であつたのに対し、「こそ」は会話もしくは会話的表現に多く、強調的・主観的であつたと言える（此島（一九六六）、三一五頁）というが、祭式の場合における神歌のオモロでは、古代中央語「こそ」に相当する「す」の方が、命令表現にも使用できることもあつて、強調表現として好まれたのだろうか。

また本論では係助詞「す」の結びの語が助動詞「め」である場合、助動詞「む」の已然形として無条件に取り扱ってきた。これは古代中央語の「む」には命令形がないことからの類推による。しかし、『おもしろさうし』には次のような用例がある。

010401 大きみ とよむくにもりや そで たれて かなわせ

しまのぬし 世ののし なりよわめ

055907 あふみやの 大ころ あまこ あわちへ もとらめ

085306 こばおもりの きみく まやゑて おこらめ

これらの助動詞「め」は係助詞「す」の結びではない。するとオモロ語においては、助動詞「む」に命令形を認めるべきだろうか。もっとも助動詞「む」が「す」の結びであつても、「む」には、もともと適当・

勧誘・丁寧な命令などの意味があるので、表現性に大きな違いはないように思われる。

（付記）この論文を記すにあたって、外間守善先生・内間直仁先生・徳川宗賢先生から、適切な御助言を頂きました。記して感謝申し上げます。）

### ○注

（一）係助詞「す」は「しよ」「じよ」「しゆ」などの異表記もあるが、本論においては「す」でこれらを代表させる。本文の引用は、外間（一九九三）から行った。ただし、読点及び「一」「又」記号は省略し、全巻通じての通し番号と節番号とを並べて六桁の算用数字で表わし、文節による分かち書きを施した。取り上げる部分と無関係で省略した部分は（こ）で表す。たとえば通し番号6番の1節からの引用は

00601 : あんしおそいしす ともしすへ ちよわれ

（国王様は 末永く ましませ）

というようになる。

（二）係助詞を受けて、連体形又は已然形で終止する終止法。終止形で終止する通常終止法に対する呼称。

（三）すでに内間（一九九四）一〇一頁で、異なる文脈毎の用例の計算がなされているが、本論では全用例を抽出・計算することにした。

（四）私見では第一巻の一・三・六・一一・一三・一四・一八・二六・三〇・四一番が、この種の類型的表現に該当。

（五）もっとも一行目が「ちよわれ（命令形）」「ちよわちへ（接続形）」と対語になっているので、問題の箇所も誤写の可能性は否定できない。

### 参考・引用文献（発行年度は西暦に統一）

伊波普猷（一九一〇）『琉球語の係結に就いて』（一九一〇年『沖縄教育』巻号未詳に所載、一九一一年二月『古琉球』初版に収められ、

一九四二年一〇月『古琉球』改訂初版に収められる。伊波普猷全集  
第一卷（一九七四・四 平凡社）二七八～二八六頁）

内間直仁（一九九四・二） 琉球方言助詞と表現の研究 武蔵野書院

此島正年（一九六六・三） 国語助詞の研究 桜風社

鈴木康之（一九七七・六） 日本語文法の基礎 三省堂（監修 佐伯  
梅友）

高橋俊三（一九九一・二） おもろさうしの国語学的研究 武蔵野書  
院

仲原善忠・外間守善（一九七八・一〇） おもろさうし辞典・総索引  
第二版 角川書店

外間守善（一九六〇・四） —— 中世文献にあらわれた —— 琉球方言  
の動詞 国語学第四一輯に所載

外間守善（一九九三・四） おもろさうし 角川書店

外間守善・西郷信綱（一九七二・一〇） 日本思想大系18 おもろさ  
うし 岩波書店

松村明 編（一九六四・四） 古典語現代語助詞助動詞詳説 学燈社  
（まつなが あきら・大学院博士課程二年）